

令和4年3月12日(土) 内村鑑三①

西洋近代と出会って以降の日本の同時の思想家と言えば、西田幾多郎、和辻哲郎、柳田国男を挙げることも多いが、内村鑑三はそれ以上に傑出した思想家と言えるかも知れない。大日本帝国を最もラディカルに批判した。キリスト教信仰を深め「無教会派」と言われる。内村に学びまた影響を受けた者には、志賀直哉、有島武郎、小山内薫、正宗白鳥、矢内原忠雄(東大総長)、南原繁(東大総長)、塚本虎次、藤井武、黒崎幸吉、金沢常雄、小西芳之介、天野貞祐(文部大臣)、大塚久雄(東大教授)らがいる。詳しくは次回行う。もし内村がいなければ彼らもいないわけで、すると戦後の新生東大、教育基本法(人格重視)などもなく、個人の尊厳や思想の自由もなかったかもしれない。私たちが安心して生活できているのも彼らのいてくれたおかげかも知れないのだ。少なくとも、内村たちがいたおかげで近現代日本の思想の幅は大きく広がり奥行きも深まったと言える。もしいなければ近現代日本の思想の幅はもっと狭く底も浅く、社会はもっと窮屈になっていただろう。

まず年譜を確認。幕末の高崎藩(松平)士の子に生まれる。没落士族。父は陽明学者、家は日蓮宗だったと言う。札幌農学校に学ぶ。すでにクラークは帰国していたが、クラークを慕う先輩たちによりキリスト教に入信させられる。新渡戸稲造は友人。開拓使の勸業課狩猟係などに勤務。1884~88年渡米。精神病院で働くなど。アメリカは理想のキリスト教国ではなく、文明・金銭崇拜の国だったと発見。東部に移動しアマースト大学のシーリー教授に出会う。「回心」を経験。帰国。第一高等中学校で教育勅語に対する「不敬」事件で失職、「非国民」「国賊」と指弾され貧窮のうちに妻を亡くす。放浪しつつ教職と文筆で生き延びる。『万朝報』に勤める。『東京独立雑誌』『聖書の研究』『無教会』などを刊行。足尾鋇毒事件にも対応。日露非戦論を主張。第1時大戦期に娘ルツ子を亡くし再臨運動を開始。ローマ書の講演を行い人気を博す。米国排日問題では対米協議会の委員となる。英文雑誌『ザ・ジャパン・インテリジェンサー』を刊行。昭和5年没(昇天)。著書『私はどのようにしてキリスト教徒となったか』(原英文)、『代表的日本人』(原英文)、『後世への最大遺物』、『デンマルク国の話』、『キリスト信徒の慰』、『求安録』など多数。全集あり。

『余はいかにしてキリスト信徒となりしか(ハウ・アイ・ビケイム・ア・クリスチアン)』(明治28年刊行)は、生い立ちから札幌農学校時代、渡米、帰国までを書く。『後世への最大遺物』(明治27年講演、30年刊行)は、金・事業・思想も大事だが、それよりも偉大で誰にでも出来るものは、「勇氣ある高尚なる生涯」だと言う。

「その人の存在自体が価値がある、という主張と、パウロの手紙における信仰(「律法・道徳とは無関係に、ただ信仰によってのみ義とされる。」内村ローマ書3章講解)とは、どこかで通底していそうだ」「自伝で祖父や父に言及するとき、世俗の名声などではなく生き方に注目している。ここにも同様のまなざしがある」「信仰においてのみ救われるというのと、無教会主義というのは、繋がっているのか」「聖伝によらず聖書のみによる信仰を言ったのがルターだ。教会への奉仕作業や世俗の善行などを排除していけば教会のしきたりなどは不要ということにはなる」「ローマカトリックや英国国教会は聖体拝領・聖餐式を重視するが、内村鑑三の集会ではそれはしない」「ローマカトリックには罪の告白もある。告白とはもともとキリスト教において罪を告白すること。聖

アウグスチヌス（400年ころ）に『告白』がある。ルソー（18世紀）にも『告白』がある。近代日本の自然主義小説では内面の欲望を描出することが大事だと信じていたに違いない。神なき時代には内面にしか聖なるものがない、ということだろう」「『**勇氣ある高尚なる生涯**』は、現代社会の結果・成果至上主義とは違う思想だ」「**文武両道**として試合の勝ち数や成績の数字を押し出しても、それでははかれないものがある」「試合ですぐ負けても低い点数でも、努力していたらそれなりに文武両道と言えるかも知れないが、文武両道という概念では取りこぼすものがある。それは弱者へのいたわり、他者への愛であったり、神の前で正しく生きることであったりするだろう」「江戸時代の侍が儒学と剣術に込めたものを明治帝国主義にあうように組み替えて文武両道を語った。現代ではスポーツと受験勉強というほどの意味で人は取っているのだろうか」「内村は明治近代への最も根底的な批判者であった」

『**代表的日本人**』は、当初日清戦争時『日本及び日本人』（原英文）として書かれた。内村は非戦論に転じ、書きあたらめて1908年（明治41年）に『代表的日本人』（原英文）を出した。さらに1921年（大正10年）に改版を出した。世界各国で訳された。日本語訳では、誰の訳がいいか？ 岩波文庫は戦前鈴木敏郎の訳があったが、今は鈴木範久の訳が出ている。西郷、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮を扱う。いずれも何らかの改革者である。天や神や仏を信じ、道徳を根本に置いた人として、内村は描く。かつ、西洋で言えば、クロムウェル、ウィリアム・ペン、レセップス、ソクラテス、ルターに比肩する、と例示する。この出し方は内村独自であり、そこに内村の思想（観点）がある。内村は日本人の素晴らしいものを西洋に向けて発信すると同時に、明治日本の信仰・道徳なき拝金主義の文明を、根底から批判している。内村が見た資料は当時出回っていた普通の資料であり、現代の歴史研究者から見れば、人物研究としては不十分だということにはなる。が、そのまとめ方、プレゼンの仕方に、内村独自の思想がある。内村は「無批判な忠誠心」「血なまぐさい愛国心」は好まない（1908年序文）が、それ以外の日本人の長所を見ている。キリスト教伝来以前に2000年に渡り神の選びのわざは生きて働いていた。それで仏教、儒教、武士道など日本人の精神的土壌が養われた。そこにキリスト教が降りてきた。（1907年ドイツ語版序文）これは旧約の土壌に新約が出現したのと同じ、という捉え方だろう。ラストでは日蓮を取り上げ特別な思い入れを持って語る。

「日蓮が自分は仏陀の使者である、という自覚を持てたのはなぜか？」「天啓のように訪れたのだろうか？」「武士道に言及しているがわかりにくい」「ユダヤ人の旧約に当たるものが武士道など日本の古い思想、そこに新約が伝わる、ということでは」「日蓮の気骨はよく、愛想の良い人間はダメとは」「文脈では、教会にいい顔をして信者になったふりをする人たちのことを言っているのでは」「ルターは聖書を尊崇したが魔女狩りを肯定した。ルター論としては不十分だ」「従順や受容的態度を批判して独立独歩の日蓮を肯定しているが、独善やカルトに陥る危険性はないのか」「聖伝や教会の権威、歴史、伝統を否定し、さらには聖書も後世の付加だと否定し、挙げ句に独善に陥ることはある。（現代の無神論者たちはそうだ。ニーチェはどうか？）」「日蓮とムハンマドを比べて優劣をつけているが、他の宗教を劣っているように言うのは、争いの元ではないか？」「ここはそうではない。ムハンマドは欧米で偽善者と見られていたが今は汚名をそそいでいる。同様に日蓮も否定されがちだったが、もっと正当に評価すべきだ、という文脈で言っている。また、ムハンマドは結局武力を用いたが、日蓮は武力を用いなかった。そこをどう考えるか」

『**日本の天職**』（1924年、大正13年）も少し見た。日本の天職は何か？ 戦争ではない。アレキサンダーやジンギスカンは日本からは出ていない。日本人は平和を愛する民だ。商工業で

もない。大商工業は大海軍を伴う。大英帝国がそうだ。日本はそうではない。美術工芸文学はどうか。独創性が欠乏している。日本は、宗教の民である、と内村は言いたい。インドで滅んだ仏教、中国で滅んだ儒教を日本は保存している。キリスト教も同じ。西洋でもルターもカルビンも忘れられている。英国人は制度化された信仰しか見ない。米国人の宗教はもっと現世的で事業教と言うべきだ。日本は違う。詩編110編3節を解釈すると、キリストは日本人の信仰の奉仕を受ける、という意味だ。「日本人の真の隆起は彼が悲境の極に達した後にある」！（戦後の焼け野原の後に日本の真の隆起がある、と預言している！？ 内村は旧約聖書の研究の中からこの発言をしているのだろう。）

「文武両道と言うが、あまり考えてこなかった」「儒学と剣術は江戸時代のそれ。今は受験勉強と勝つためのスポーツ？」「日本の天職は宗教だと言うが、日本人は多様なものを取り入れて共存させてきたのが長所ではないか」「異文化共生とは何か、ハイブリッドを産んでこそと考えるか、雑多なものの雑居（相互不可侵）を異文化共生と呼ぶか、これらは難しい」「現代日本の宗教の現状はどうか。形骸化している、無神論者が多い？」「儒教仏教は日本人の生活の中に長い年月で浸透してきていると言えるが、キリスト教はどうか」「クリスマスやバレンタインはどうか」「あれは商業主義で騒いでいるだけで、キリスト教に目覚めているわけではない」「クリスマスはデートの日だと思い込んでいるだろう」「だからクロムウェルはクリスマスは異教の祭りだと批判したのだ」「茶道はキリスト教の聖体拝領、武士道は宣教師の一つのものに不惜身命する姿勢、とも言える」「仏教・儒教は列島に伝来して1500年経っている。キリスト教はザビエルからでもまだ4～500年くらいだ。これからかも」「日本人は本来農民で、とあったが、今は農民はいない。今は商工業と情報産業の時代だ。フランスなどは農民が多い」「日本人は農業をやめても農民的エトスはまだ残っている。が、それも消えるのか？」「食料自給率はどうなる」

令和4年3月23日（水）（春季課外の午後に実施）内村鑑三②（内村の後継者たち）

内村に早期に影響を受けたのは、正宗白鳥、小山内薫、有島武郎、志賀直哉ら。しかし彼らは後継者とは言えず、ある時期に内村から離れた。後継者・継承者と言えるのは（その後立場が分かれた者もあるが）南原繁（東大総長）、矢内原忠雄（東大総長）、天野貞祐（文部大臣）、黒崎幸吉（伝道者、聖書注釈者）、大塚久雄（経済学者）、藤井武（伝道者）、塚本虎二（伝道者、聖書注釈者）、小西芳之介（伝道者、独自の恵心流キリスト教）など。学者、聖書注釈者、伝道者が多い。都会のエリート知識人のイメージは確かにある。大本教や天理教など庶民に浸透した宗教とは感じが違うかも知れない。イエスは庶民とともにあった。そこをどう考えるか。

天野貞祐の小伝を読んだ。野球少年だったが学業不振とけがや病気で学校を中退するはめに。絶望の中、内村の『後世への最大遺物』と出会い、奮起する。さらにヒルティエの著作とカント哲学に出会い、京大教授、戦後文部大臣となる。彼のおかげで（漱石門下の安倍能成も併せて）戦後の人格主義教育があると言える。「人間は物品でなく人格」「帝政ドイツも帝政ロシアも道徳性の欠如故に滅んだ」「大日本帝国を敗戦の惨害に導いたのは、指導階級、諸派閥、だが同時に私たちの教養水準の低さだ」など、慧眼からくる名言がある。

「漱石にも通じる。外発的な開化のせいで日本人が神経衰弱に陥るなど。もともと日本人は優れた美質を持っていたのに。道徳や教養を忘れ実利実用ばかりに走る現代の状況も危うい。アメリカでも貧富差が拡大し、プアホワイトの寿命が縮んでいるとか」「道徳って何だろう。小中学校で

やった道德の授業は、当たり前なこと過ぎて深みがない。自分の精神の向上に繋がったとは思えない」「戦前こそ偉大な道德の時代だった、とする主張に対し、坂口安吾は、『嘘をつけ！』と激怒している。軍国主義は嘘で固めていた」「大日本帝国は腐敗していたから滅んだ、ナチス・ドイツもソ連も、となる。現今のあの国やその国も？」「人権教育と道德教育は同じなのか」「無教会主義派はエリート臭く、庶民に広がりにくかったという点について、教会が生活に密着していれば強いはず。あるいは、ステンドグラスや壮麗な教会音楽やマリアの像で庶民を引きつけるとか。そこはカトリックが強い。(ロシア正教会や英国国教会も同様。)」 「しかしそれは本物ではない。他方、所謂『本物』でなくて何が悪い、とも問える」

次に、**矢内原忠雄**の小伝(**赤江達也『矢内原忠雄』**(岩波新書2017年))を少し読んだ。矢内原は愛媛の今治の出身。神戸中学を経て一高、東大へ。新渡戸稲造と内村鑑三に学ぶ。一時住友に勤務するが、帝大の先生となる。植民地学を講ずる。日中戦争開始ころの発言が問題視され帝大を辞職。家庭集会と小雑誌を行う。(これは内村と同様。)戦後東大教授に戻り、戦後のリーダーの一人となる。**東大教養学部**を作る。戦後すぐ、52才の矢内原は、**日本の国民がキリスト教を受け入れ日本において「神の国」の実現する時が近づいた**と考えた。昭和20年11月の講演では、日本精神の神に対する敬虔さは良いが、神観念が不明確でありこれが日本精神の短所だ、と考えた。**平和国家**については、平和国家とはキリスト教の神の国のことであるが、その一方で言えば日本人の歴史と伝統のうちにも見いだされる。一つは天皇と国民が家族的関係で結ばれていることで、もう一つはアマテラスがスサノオとの戦いの後天の岩屋戸におかぐれになったことに「無抵抗主義による平和の態度」を見る。東大総長などになり公人としての立場が強まると、預言者としての立場との間に矛盾も感じた。(以上赤江達也前掲書。)

「これは無抵抗主義ではなく、非暴力の抵抗だ。アマテラスがサボタージュすると世界が困る。非暴力の実力行使だ」「矢内原は天皇や日本が好きだ。戦後の知識人の中で、もっとコスモポリタンで無国籍主義の人はいるが、内村や矢内原は日本に拘る傾向がある」「矢内原が内村に、洗礼を受けずに死んだ人がどうなるか、を問うたとき、内村は、自分にも分からない、と答えた」「その意図はよく分からない。内村をしっかりと研究してみないと。万人がすでに救済されているのか、信じた人だけが救済されるのか、洗礼などの儀式は内村においては不要と見なされていたろうが」「キリストは全人類の罪を背負って死んだはず。内村はなぜくちごもったのか」「弟子の悩みと同じ地平に立ってみせたのかもしれない。演技ではなく誠実に」「天皇と日本人は家族だというのは、柳田国男なら言うだろうが、矢内原も言うとは」「現今の皇室の真子様ご結婚問題で、人々はネット上の匿名で皇室をたたいている。皇室には反論する自由もない」「皇室には人権がない、二度目の人間宣言が要る、という議論はある」「矢内原が言う、国家権力に対して対峙できる人格というのは、匿名で人の悪口を言う連中のことではない。集団で流されて人の悪口を書き込んで連中こそが戦争を始めたのではないか」「彼らが駅前でリアルの世界で変装して同じことを出来るか、という出来ないと言う」

小西芳之介は、恵心流キリスト教と言って、**恵心僧都源信**の念仏と同様イエスの名を呼べば救われる、とロマ書10章13を解釈した。また、ロマ書3章21を「律法道德とは無関係に」と内村が言った、と言い、3章22の「キリストへの信仰によって」を、原語に戻って「キリストの(神への)忠実によって」と解釈する。そうすればキリスト自身の絶大な苦行によって、全人類がすっかり救われることになる。その時「行」はどうなるか。

「友人は俗世を捨てて仏門に入ると言っていた。自分はキリスト教の神父か修道士になって静

かに暮らしたい」「中南米やアフリカの現場でがんばるのは結構大変かも」「ゼノ修道士やマザー・テレサは貧しい人々の中で忙しく働いた。日本にもお坊さんや神父さんで困っている人を助けている偉い人は実在する」「インドの仏教とはアウトカーストだがそこに行って人助けをしている日本人の僧がいる。すごく精力的な印象だった」「ジャン・バルジャンは一時パリの裏町で修道院に隠れていたことがある」

最後に南原繁を扱った。香川出身、東大総長、終戦工作もした。戦後サンフランシスコ講和条約の時吉田茂に「曲学阿世の徒」と言われた。吉田はアメリカ中心の片面講和論、南原はソ連も含めた全面講和論だった。ロシアがウクライナを攻めている2022年3月現在、どう考えれば良いか。

「戦中戦後に内村グループがいたことは良かった。個人・人格の尊厳、思想・信教の自由などがおかげで定着した。教育も良くなった。政治的にも吉田を批判できる人がいたのも良かった」「戦時中のことを題材に平和教育を受けたが、戦争が終わってからのことを題材に平和を論ずることをあまりしてこなかったかも」「戦後日本が平和を70年続けられたのは、アメリカの核と経済の傘のおかげだ、と言う人があるが、日本人自身の平和憲法（GHQの押しつけではない。憲法研究会案を見よ）や平和で豊かな社会建設の努力のたまものでもある」「戦後すぐは非武装中立、国連軍が来る（代わりに米軍が来た）、自衛隊と米軍のコラボ、独立自衛の軍隊を持ち米軍には帰ってもらう、などの選択肢があった。現状はどれかな」「いざとなったら米軍は日本を守らないのでは」「核もアメリカは安易には使わないのでは」「最後は人間同士の絆・信頼関係が大事。グローバル経済と称して世界から収奪するのは不可だが、人の交流は大切だ」「国内の矛盾を、対外危機を起こすことでごまかそうとする人がいるが」「首脳レベルではなく国民レベルで信頼を築くのがよい」「無責任に言えば、大陸は陸続きなので人々は東へ西へと移動してきた。それを、国家や民族という、つい近年出ただけのもので区切るのはどうなのか。大切なのは民の暮らしだ」「今の問題は、ロシアの兵器が罪もない市民の特に赤ちゃんや子どもを殺害していることだ」「どうやって止めるのか。国連PKOやPKFも役に立つが、うまくいかず紛争当事者になってしまうことも」「はじめから戦争を起こさない、侵略主義の国を出さないことが大事だ」「そのためには」

令和4年3月26日（土）福沢諭吉

令和3年度最終回は福沢諭吉を扱った。相良亨編『日本思想史入門』（ペリカン社、昭和59年）から竹内整一氏の解説を見た。福沢は天保5年生まれ、内村鑑三よりもさらに年上だ。大分の中津藩士として大坂に生まれ育った。中津に戻るが長崎に遊学、さらに大坂の緒方洪庵の適塾で蘭学を学ぶ。幕末にアメリカを2回、西欧を1回訪問。『西洋事情』は好評となる。維新後は慶應義塾を経営、在野の人を通じた。明六社に参加し啓蒙活動を展開。日清戦争では主戦論。大きく言って和魂洋才、折衷派の一人だが、「魂」と「才」を司る新しい主体的精神を訴えようといった点で評価されるべきものだ。「数理学」と「独立心」を重視。西洋近代を範としているが、それまでの精神的伝統（たとえば自ずから然る天道意識、武士の独立心）を無視しては考えられない。「一心独立して一国独立す」は有名な言葉。正道ではなく「権道」（その場に応じた手段）として「馬鹿者は道理では扱えない」とするなど、問題となるポイントも多い。竹内氏は大略上のように解説している。

『近代日本思想史』（有斐閣、1971年）のひろた・まさき氏の解説も参照。『学問のすすめ』

はベストセラーとなったが、民撰議員論争を機に福沢の論理は変貌する。啓蒙意欲を減退させ、啓蒙の対象を士族層に限定、さらには「権道」的現実主義を宣言し、内安外競・富国強兵の侵略主義を先取りすることとなった。以上ひろた・まさき氏から。他に清水政之氏の解説も。福沢は進歩主義ではある。漱石も。当時、**社会進化論**が東洋にやってきて、早く西洋化・近代化しないと列強に敗れる、という強迫観念を持った人が多い。実際には別の選択枝もあったのに。浅薄な近代主義・西欧化・社会ダーウィニズムはおかしい、と気づいたのは、福沢より後で、北村透谷だったり、漱石だったりする。また西田・和辻・柳田だとすると、実に長い年月がかかっている。

「晩年に変節したのはなぜ」「民権運動に否定的だった。民に失望した？ 自分がすでに既得権益を得ていたから？」「この実学主義は、漱石『こころ』の若い私の兄に似ている。人間の内面の価値を認めていない」「いや、兄は帝国主義者だが、福沢はまずは実利と商売の人だ。でも、実利と商売のためには、結局軍艦でシーレーンを守るので、帝国主義になるのか？ 資本の独占の問題か？」「幼少期は漢学、長じては洋学。次々と新しいものに飛びつく。新しい物好きの人？」

『学問のすすめ』冒頭を読んだ。

「慶応は在野の民間企業で働く人を育て、三井や三菱に人を送り込んだと聞く」「福沢は**興亜論**から**脱亜論**に行ったので**帝国主義者**のイメージだが、最近**リバタリアン**ではないかと言われている」「弱者を底上げする理屈が弱い。スタートラインだけでも平等にすべきでは」「慶応幼稚舎でしかもK組出身者でないと純血でない、といった差別的な言説が語られているとか。天は人の上に…、はどこにいったのか」「一身独立して一国独立す、と言うが、歪めれば、自分で一身を整え、お国のために捧げる、という理屈にもなるかも」「学問の中身が問題で、人文学、特に古典学なども重視すべきだ」「愚民呼ばわりが多く、上から目線だ」「江戸のサムライは上から目線のところがあった」「賢くなれ、と言っている。賢くないと強権に威圧される、と」「勉強すれば貴人になれる、と言うが、具体的な途中の過程への言及がない。例えば北欧のように学校に無償で行かせるとか」「中国の科挙に何が不足だったか」「福沢の言う勉強の中身はやはり問題だ。**目先の実利実用だけではいけない**。昨今は無駄の排除の傾向があり、社会が脆弱になる、と誰かが言っていた。無駄こそ大切なものだ」「一見無駄に見えるが、それは見る側の狭い見のせいで、視野を広く持てば無駄ではない、ということはある。が、視野を広く持ってもそれでも全く無駄に見えることについては、どうかな」「今はコロナ禍で逆に無駄を楽しむ傾向もある」「コーヒーは豆を選んでひいてドリップでいれる、その過程が楽しい」「お茶を入れるのもそうだ」「結果ではなくプロセスを生きることには人生の意味がある」

『福翁自伝』冒頭も少し読んだ。「年を取ってからの述懐なので、いささか盛っているところがあるかも」「武士の子で儒教教育を受けた子は大変だ。町人の子は買い食いをするが、武士の子は腹が減っても買い食いなどしない」「適塾の**会読法**は面白いシステムだ」「面白い。新しい時代で活気がある」「福沢の人生を知らなかった。幼少期から様々なものに好奇心を持って生きていたことがわかる。自分の芯（核になるもの）がしっかり出来ていたから、新しい時代に流されずにすんだのか」「洋学を学んだが、ベースには幼少期の漢学があった。**今は実学重視の傾向だが、現代の人に、考え方のベースになる古典学やモラルはあるのか**」（渋沢栄一とどう違うかも考えてみたい。）

今年度はこれで終わり。続きは幕末から遡る。